

殉死

1947年卒業

丸博

平成20年10月30日、私は栃木県那須の大丸温泉を訪ねた。

青年時代に父や姉と、又普通部の友人と何回も投宿したことがある。正面に茶臼岳、右に朝日岳、左に三本槍の那須連山を見上げながら、漸く尾根まで辿り着いて、さらに頂上から三斗小屋温泉まで、あと2キロくらいの処まで来たところで、強風と疲労のため下山することにした。

そして懐かしい大丸旅館を訪ねたが、あいにく当日は休業で主人が留守であったため、番頭さんをお願いして乃木大将の遺品を拝観させて頂いた。乃木さんは明治34年(1901)から2年半余那須野で農耕生活を送られたことがあり、その際に知り合ったのであろう先々代の当主大高氏を書生として雇い、東京赤坂の乃木邸から働きながら早稲田の専門学校に通学させていたと聞いている。

乃木さんは嘉永2年(1849)江戸麻布日ヶ窪の長府毛利藩邸で生まれている。後に萩の玉木文之進(松下村塾の開祖)に師事してその人格形成の基を築いた。玉木の甥に当たる吉田松陰とも同門である。

明治11年西南戦争では熊本城で西郷軍と戦い、軍旗を奪われるなどのこともあったが同年陸軍中佐に任ぜられている。

明治37年第三軍司令官として日露戦争に参戦し、翌38年旅順陥落、ステッセル將軍との会見を果たしている。その間南山で長男勝典26歳、爾靈山で次男保典24歳を共に戦死させている。

明治39年1月14日に戦勝国の將軍として凱旋しているが、多くの部下将兵を失い、2人の息子を戦死させた乃木大将の心中は、いかばかりか辛いものであったに違いない。

明治天皇は彼を高く評価し信頼して、のちに学習院長に任命し、昭和天皇の教育の重責を担わせたのである。

明治45年(1912)明治天皇が崩御され、乃木は通夜式に参列したが、大正元年9月13日午後8時、御大葬当日、御霊が宮城発信の時刻にあわせて自宅で自刃している。

乃木希典64歳、夫人静子54歳である。書生の大高氏には葬列に参加するように命じ、その留守中に乃木が短刀で夫人を刺殺し、続いて自分は大刀で割腹自殺を遂げたのである。

乃木の遺書によれば、静子夫人には生き残って生活する心構えや、具体的な生活指針等を詳細に記してあったのであるが、静子夫人はすでに息子2人を亡くし、ここでさらに夫に逝かれる事をいたく悩まれ白装束で夫の前に現れ、自決の決意を陳べられたとのことである。乃木自身を介錯する人がいなかったため、どのようにして自決したのか私には想像するしかなかった。

最も自分を信頼して下さった明治天皇の御跡を慕っての乃木將軍夫妻の、これが殉死の一部始終である。

100年前の日本の士族階級の血の中に流れている主を重んじ、家を愛し、先祖を敬愛する儒教思想である。福沢先生は日本人が世界に誇れる歴史上の人物は、重い年貢の取り立てに困窮する農民のために一命を賭して闘った、佐倉宗吾のみであり、一人の主君の恨みを果たすために47士が決起して主君の仇を果たした忠臣蔵をあまり評価してはいない。

しかし単なる主君の仇討ちではなく「喧嘩両成敗の法を自分達の力で実現させた」と解釈するのがこの事件の本質だと私は思っている。

近松の描く心中物語では、家業を守るべき主人が妻以外の女性と恋愛の末駆け落ちして心中する。他にもこれに似た物語が何篇かあるが、「なにも死ななくとも、そこまで纏れてしまったものを、お互いに話し合いで精算して夫々が新生活に入れば良いではないか」と思えないでもないのだが、「家業」を重んずる当時の道徳からすれば、到底許されないことであり、果ては心中という悲恋物語に終るのである。

さて私たち日本人の心のオリジナリティーは、いったい何処にあるのだろうか？

殉死か、心中か、はたまたあっけらかんと妻を離婚して、恋人と新居を構える欧米式でよいのか、頭の中がごちゃごちゃして整理できないが、あまり合理的でもなく、かといって不合理でもなく、日本人として如何にあるべきかを考え続けるのである。

本来中国、朝鮮より伝来した儒教思想、朱子学の流れが、江戸時代を通じて武家から大商人に至るまで浸透した日本人の社会に、江戸末期から明治、大正、昭和への急激に欧米流の人権思想、差別の撤廃を叫ぶ民主思想が採り入れられたことにより、両者が良いことりの共存社会として、せめぎ合いながら現実に存在していると言えれば良いのであろうか。

参考 福澤諭吉著「文明論の概略」「学問のすすめ」 岩波書店刊

尾藤正英著「日本文化の歴史」「江戸時代とは何か」 岩波書店刊

渡邊京二著「逝きし世のおもかげ」 平凡社刊